東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2006年1月27日

親戚に対する責任

イスラームの教えが繰り返し強調している道徳的、社会的に大切な物事の一つが、親戚に敬意を払い、彼らに慈しみといたわりを示すことです。近い親戚も、遠い親戚も、全ての人たちに心からの愛情を抱き、関係を保ち続けることは、宗教的、道徳的義務の一つです。なぜならアッラーは、「アッラーに仕えなさい。何ものをもかれに併置してはならない。父母に懇切を尽くし、また近親や孤児、貧者や血縁のある隣人、血縁のない隣人、道づれの仲間や旅行者、およびあなたがたの右手が所有する者（に親切であれ）。アッラーは高慢な者、うぬぼれる者を御好みになられない。」（婦人章第 **36** 節）と仰せられておられるからです。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も、「アッラーとあの世を信じる者は、親戚たちに心を配りなさい。」「親戚とのつながりを絶つ者は、天国には入れない。」と仰せられました。

親愛なるムスリムの皆様。親戚の中に、状況のよくない人がいれば、物質的、精神的な援助を行なわなければなりません。援助を必要としていない人たちであれば、彼らの心を喜ばせ、目上の人には敬意を払い、小さい者たちには慈しみといたわりを持って接しなければなりません。このことに関して預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、次のようにおっしゃられました。「相手もしてるからしなければ、という理由で親戚を訪問する人は、真の意味で相手を心にかけていることにはならない。真の意味での訪問は、相手からのつながりが絶たれた後でも、自分からはつながりを絶たず、続けていくことである。」

この聖ハディースから理解できることは、親戚が私たちに顔を背けた時にも、彼らを訪ね、近況を問い、彼らの状況に接していくことができれば、その時、親戚に対する義務を、真の意味で果たしたことになるのです。訪問を絶ってしまった人を訪問し続け、よくないことをする人に対してよい行いをし、そしてその人を許すこと、自身にとって都合の悪いことであっても、真実を語ること、これらは宗教的、道徳的な美徳です。この訪問は、ただ、アッラーのご満悦を得るためのもので、物質的な見返りをあてにしてはいけません。

クルアーンでも、ハディースでも、親戚を気にかけることは、礼拝やザカートのような義務のイバーダのすぐ後に続いて言及されています。これは、このことのイスラームにおける重要性を示しているのです。イスラームにおいて親戚を訪問するという義務を果たす人に大きな報酬が与えられるのはこのためです。

親愛なるムスリムの皆様。親戚、さらにはあらゆる人々に対し、物質的、精神的なあらゆる形の援助を行なうこと、彼らに対して笑顔でいること、優しい言葉を用いること、これらに注意を払いましょう。今日のフトバを、クルアーンの一つの章句で締めくくりたいと思います。「人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。かれはひとつの魂からあなたがたを創り、またその魂から配偶者を創り、両人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる。あなたがたはアッラーを畏れなさい。かれの御名においてお互いに頼みごとをする御方であられる。また近親の絆を（尊重しなさい）。本当にアッラーはあなたがたを絶えず見守られる。」（婦人章第 **1** 節）